第45号
2022年12月

大阪公立大学医学部附属病院医療連携

第46回「Face to Faceの会」たより

一般演題Ⅰ

『COVID-19と血栓

～内科・整形外科の先生への妊婦を診察する際の注意点とお願い～』

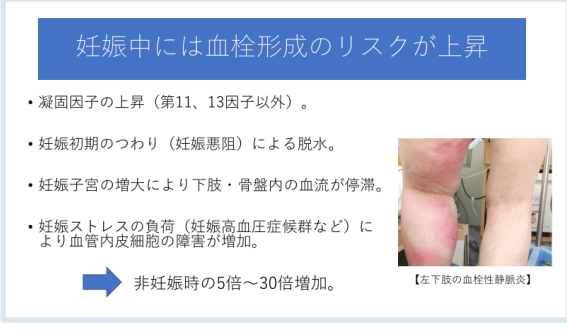
女性診療科（産科・生殖内分泌・骨盤底医学）
診療科部長　橘　大介

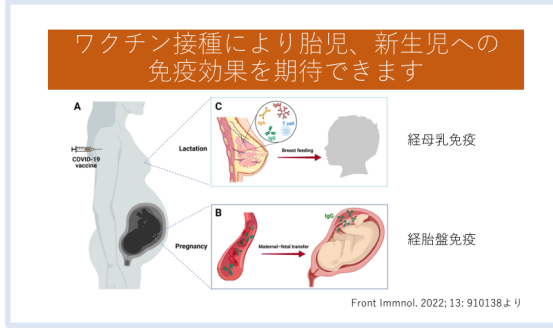
【新型コロナワクチン接種と妊娠中の血栓】

妊娠中には、出産時の出血に備えて血液の凝固機能が亢進しており、第11因子、第13因子以外の凝固因子が増加していると考えられています。妊娠週数の進行に伴う子宮の増大により骨盤内や下肢の静脈血がうっ滞し深部静脈血栓症を起こしやすくなります。分娩後は子宮内圧が低下するため肺血栓塞栓症の好発時期となります。特に、多胎妊娠や長期の安静を要する切迫早産などではリスクが増加しますが、妊娠初期の「つわり（妊娠悪阻）」や冠婚葬祭などに伴う「長時間の正座」などでも、下肢の深部静脈血栓症、さらには、それに続発する肺血栓塞栓症などが起こるため注意が必要です。

一般成人を対象とした新型コロナワクチン接種後の稀な副反応として血小板の減少を伴う血栓症がありますが、妊婦への投与で特に血栓の合併が増加したという報告は今のところ見られません。また、胎児奇形や流産、早産などとの関連も報告されていません。むしろ妊娠中のワクチン接種は母体で産生されたIgGが胎盤を介して胎児へ、また、IgG、IgM、IgA、T細胞などが母乳を介して新生児へ運搬されることを期待できます。新型コロナウィルスに感染したまま出産した場合には母児の分離が必要になる上、新生児期～乳児期のワクチン接種が行われていない現状では、やはり妊娠中の新型コロナワクチンの接種は強く推奨されます。

妊娠中には所謂「こむら返り（ふくらはぎあたりの筋肉が痙攣）」を起こす頻度が多くなりますが、中には血栓による痛みが隠れていることも考えられます。妊娠中の検査や治療には何かと制約がありますが、妊婦さんが下肢の痛みを訴えたら深部静脈血栓症を鑑別診断に挙げて頂き、確定あるいは疑わしいと考えられる場合には、どうぞ大阪公立大学医学部の女性診療科にご紹介いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。





一般演題Ⅱ

『COVID-19の現状と課題』

感染症内科
診療科部長　掛屋　弘

2022年11月末、我が国では新型コロナウイルス感染症の第8波の始まりを予感させる新規患者の増加傾向が認められるが、今後の感染動向に影響を与える因子として、（１）変異株の動向、（２）免疫力の維持・補強、（３）感染予防とリスク行動回避が挙げられる。新型コロナウイルスはこれまでに変異株の出現とともに大きな流行の波を作ってきた。現在の主流株はオミクロン株BA.5であるが、新規の亜系統株BQ.1への移行が推測されている。また、免疫力の維持・強化として新型コロナワクチンは90%以上の高齢者で3回目接種が終了、さらに4回、5回目の接種が進んでいるが、全体の3回目終了者は67%程度にとどまり、若い世代の3回目の接種が課題である。さらにCOVID-19の拡大防止には、これまで実施してきた3密の回避、マスク着用、手洗い、換気等の基本的な感染対策やリスク回避を継続できるかが鍵となる。また、今冬はコロナとインフルエンザの同時流行が危惧されている（図１）。海外では秋季よりインフルエンザ（特にA型H3N2：香港型）の流行が報告されている。我が国ではインフルエンザは過去3シーズン流行がなかったため、国民のA型H3N2に対する抗体保有率が全世代とも低下していることが知られ、インフルエンザ流行にも備える必要がある。大阪府下では発熱患者に対応する医療機関はコロナ流行前と比較して約６割程度にとどまり、発熱患者が急増すると対応が難しくなる可能性もある。基本的な感染対策（図２）を実施し、すべての医療機関で発熱患者を診療できる体制を整えることが急務である。

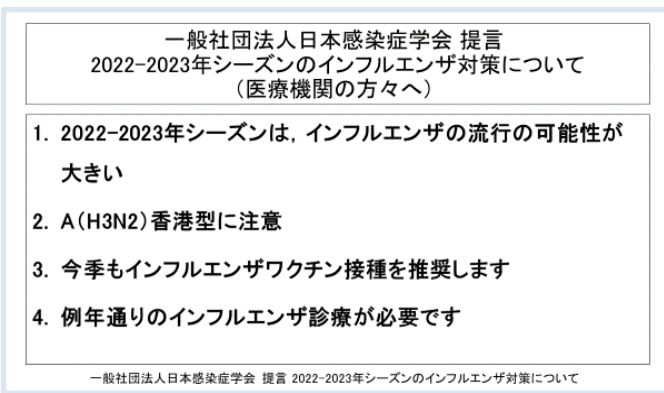


図１

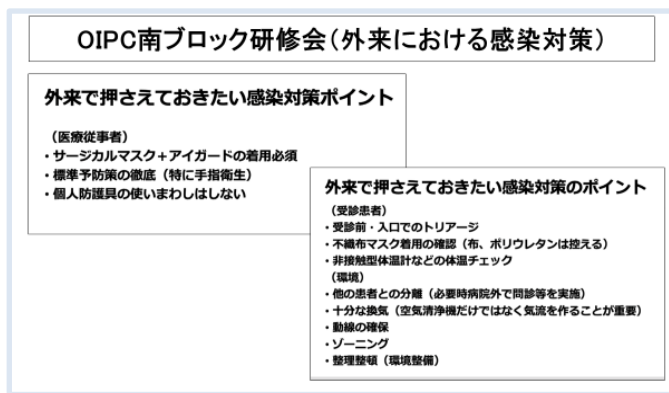


図２

次回開催のお知らせ
Face to Faceの会
日　時：令和5年3月18日（土）　16:00～17:30
場　所：あべのハルカス25階　貸会議室

発　行：大阪公立大学医学部附属病院「Face to Faceの会」
文　責：患者総合支援センター長　角　俊幸（世話人代表）
連絡先：06-6645-2857（患者支援課）